

病虫害発生予察情報(10月予報)

令和7年9月25日

静岡県病虫害防除所長

1 予報概況

作物名	病虫害名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	トビイロウンカ	発生量：少	9月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 9月の成虫誘殺数：少(誘殺なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
温州 みかん	黒点病	発生量：多 (発病度 2.5)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.08)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率 1.4%)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：多 (発病度(果) 0.6)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	果樹カメムシ類	飛来数：少 ただし、一部で飛来に注意	予察灯誘殺数：少 (－) フェロモントラップ誘殺数：並 (±) ヒノキ着果量：少 (－) ヒノキ寄生数：少 (－) ヒノキ球果吸汁痕数：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
茶	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.5 頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.3 頭/1.25m ²)	9月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率1.1%)	9月上中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発 生 量：並 (発病株率 11.6%)	9月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発 生 量 黄化葉巻病：やや少 (発病株率 1.0%)	9月中旬発生量：少 (－) 9月中旬のコナジラミ類発生量：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋)
	タバコ コナジラミ	コナジラミ類：やや多 (寄生株率 11.6%)	9月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋)
だいこん	コナガ	発 生 量：やや多 (寄生株率 0.1%)	9月トラップ捕獲数：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
ねぎ (白ねぎ)	黒斑病・葉枯病	発 生 量：多 (発病株率3.9%)	9月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気 温：高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発 生 量：多 (寄生株率9.2%)	9月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	シロイチモジヨト ウ	発 生 量：並 (寄生株率1.4%)	9月中旬発生量：少 (－) フェロモントラップ誘殺数：多 (＋) 病害虫防除員報告：多、やや多 (＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギハモグリバエ	発 生 量：やや少 (被害株率47.9%)	9月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	炭疽病	発 生 量：並 (発病株率 2.0%)	8月上中旬発生量：少 (－) 9 月 発 生 量：やや少～やや多 (－～＋) 気象予報：気 温：高い (＋)
	ハダニ類	発 生 量：やや多 (寄生株率11.6%)	8月上中旬発生量：多 (＋) 9 月 発 生 量：並 (±) 気象予報：気 温：高い (＋)
作物全般	ハスモンヨトウ	発 生 量：多	9月トラップ誘殺数：少～やや多 (－～＋) 病害虫防除員報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	オオタバコガ	発 生 量：やや多	8月21日～9月20日の成虫誘殺数：少～並 (－～±) 気象予報：気 温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県の過去 10 年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の 1 か月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（＋）、少発要因の場合は（－）を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害虫
防除所 HP
が新しくな
りました。



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyos/higoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

巡回時（調査期間：9月9～12日）の生育は普通期栽培が概ね乳熟期～成熟期であった。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、本種の寄生は確認されなかった（平年0.7頭/株）。
- ・県内4か所の予察灯のトビイロウンカの誘殺は確認されなかった。なお、誘殺数データは静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」で提供している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、増殖が助長される気象条件である。

防除対策

- ・気温が高い場合に急増することがある。被害や成幼虫の寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

【温州みかん】

<生育の概況等>

病害虫防除員からの報告によると、生育や果実の肥大は産地によりばらついているが、いずれも平年並の地域が多い。

●黒点病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均発病度は3.1（平年1.7）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・20～27℃の水滴中で胞子が発芽し、葉や果実に感染して黒点が出来る。降雨日の最低気温が22℃以上になると容易に感染する。
- ・本病は風雨によって伝染し多雨は発生を助長するため、秋雨による果実への感染についても注意する。
- ・枯枝で胞子が作られるため、樹冠内部の枯枝やほ場の内外に放置された剪定枝、切株などが伝染源となる。夏の高温少雨で枯枝が増えているため除去に努め、園内や周囲に伝染源を放置しない。
- ・防除実施の間隔は、25～30日または累積降水量が250～300mmを目安とする。アメダスの気象データなどから栽培地域での累積降水量を確認し防除を実施する。
- ・後期感染を防止するため、降雨の前など適宜防除を実施する。ただし、収穫前日数に注意する。

●かいよう病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.4（平年0.07）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・温州みかんは中晩柑類に比べて本病に感染しにくいとされているが、昨年から多発が続いている。

- ・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。
- ・台風 15 号により感染が拡大した可能性がある。ほ場の発生状況に注意し、発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、除去する。
- ・銅剤散布は中晩柑類に比べ薬害が出やすいため注意する。
- ・防除対策については「[令和 7 年度技術情報第 1 号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・9 月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は 2.4% (平年 1.6%) と平年より多かった。
- ・1 か月予報によると、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・着色期以降に発生すると果実が着色不良となり商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●カイガラムシ類（マルカイガラムシ類、ヤノネカイガラムシ、イセリヤカイガラムシ、ロウムシ類、コナカイガラムシ類）

- ・9 月上中旬の巡回調査におけるナシマルカイガラムシの平均寄生果率は 1.6% (平年寄生なし) と平年より多かった。地域別では、同様に東部で 0.1%、中部で 2.1%、西部で 2.5% と、特に中西部での発生が多かった。
- ・同様に、令和 7 年 7 月及び 8 月の巡回調査では、ルビーロウムシの平均寄生果率は、0.2% (平年 0.06%) 及び 0.3% (平年 0.2%) と、それぞれ平年より多かった。
- ・近年の温州みかん巡回調査では、各種カイガラムシの発生が平年より多い状況が続いている（データ略）。例えば、令和 6 年にはヤノネカイガラムシ（5～6 月、8 月）及びルビーロウムシ（8～9 月）、令和 5 年にはイセリヤカイガラムシ（3～4 月）及びルビーロウムシ（3 月）、令和 4 年にはイセリヤカイガラムシ（8～9 月）及びルビーロウムシ（9 月）の発生がそれぞれ平年より多かった。
- ・近年、マルカイガラムシ類（アカマルカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）の発生が増加しているとの報告が、東部や西部地域の病害虫防除員から寄せられている。
- ・剪定によりカイガラムシ類の寄生枝を除去するとともに、散布薬剤が届きやすい樹体に仕立てる。
- ・発生園では、越冬成虫に対する冬季のマシン油乳剤散布を徹底し、初期密度を下げる。
- ・カイガラムシ類幼虫に対する薬剤散布は、発育ステージが比較的そろっている第 1 世代の防除適期に実施する。なお、第 1 世代幼虫の防除適期は、カイガラムシ類の発生種により異なるため注意する。
- ・カイガラムシ類（第 1 世代幼虫）に対する防除適期
 - （1）マルカイガラムシ類（アカマルカイガラムシを除く） 6 月上中旬
 - （2）アカマルカイガラムシ 6 月下旬～7 月上旬
 - （3）ヤノネカイガラムシ 6 月中下旬

(4) イセリヤカイガラムシ 6月上中旬

(5) ロウムシ類 7月上中旬

(6) コナカイガラムシ類 6月上中旬

- ・防除対策については「[令和7年度技術情報第4号（かんきつ カイガラムシ類）](#)」も参照する。

●青かび・緑かび病

- ・病原菌の生育適温は25～27℃である。土壤中に胞子の形で存在し、土ぼこりとともに果実表面に付着、傷口から感染する。台風などの強風雨は胞子が跳ね上がるため、樹上での発生を助長する。
- ・樹上果、摘果果実ともに発病果を放置すると胞子形成が進み発生が増加していく。ほ場の見回りを行い、発病果は発見し次第速やかにほ場外に持ち出して処分する。
- ・収穫時のハサミ傷や収穫コンテナに混入した枯れ枝や小石などによる傷は、感染を助長し貯蔵中の発病が増加する。果実の運搬や選果が手荒で果皮に傷が付く場合でも同様であるため、丁寧な収穫作業を行う。
- ・果実が過熟にならないよう適期に収穫し、雨の日や雨の翌日など果実に水滴が残っているようなときには収穫を避ける。

●褐色腐敗病

- ・病原菌は土壤中に存在し、雨による泥のはね上がりなどで遊走子が果実に侵入する。
- ・主な伝染は水媒介であり、連続降雨や強風雨によって感染が著しく助長されるため降雨前に防除を行う。
- ・感染成立時間は25℃で1時間と極めて短く、感染が拡大しやすいため、過去に発生したほ場では特に注意が必要である。
- ・ほ場の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。土壌からの雨滴の跳ね返りを防止するためにマルチ栽培や樹冠下に敷ワラ、敷草を行う、果実を地表面から離すために結果枝のつり上げや下枝に支柱を立てるなど耕種的防除に努める。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、果実の平均発病度は1.3(平年0.6)と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・台風などの強風を伴う雨によって感染が著しく助長され、急激に多発する場合がある。気象情報とほ場の発生状況に注意し、感染拡大を防ぐよう降雨前の予防的な防除に重点を置く。
- ・台風15号により感染が拡大した可能性がある。ほ場の発生状況に注意し、発病枝は伝染源となるため除去する。発病した夏秋枝は特に除去する。
- ・ミカンハモグリガの被害は本病の発生を助長するため、除去する。
- ・防除対策については「[令和7年度技術情報第1号（温州みかん、中晩柑類 かいよう病）](#)」も参照する。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・ 県内4か所の予察灯における9月1～15日の合計誘殺数の平均は、254頭（平成26年969頭）と平成より少なかった。
- ・ 県内6か所のフェロモントラップにおける9月1～15日の合計誘殺数の平均は、72.8頭（平成26年76.7頭）と平成並だった。
- ・ ヒノキ球果の着果量（指数）は、県平均1.9（平成26年4.9）と平成より少なかった。なお、本虫は球果を餌として増殖するため、着果量が少ないと新成虫の増殖は抑制される。
- ・ 9月上中旬のヒノキ球果における平均寄生数は、0.5頭/10結果枝（平成26年6.2頭）と平成より少なかった。なお、9月の寄生数は、8月（2.7頭）よりも少なかったが、これは成虫がヒノキから離脱しているためと推測される。
- ・ 9月上中旬のヒノキ球果における本虫の平均吸汁痕数/球果は14.3（平成26年16.0）と平成よりやや少なかった。なお、本県ではヒノキ球果における吸汁痕数が20に近づくと、本虫がヒノキから離脱し、餌を求めて果樹園に飛来するとされている。9月上中旬時点では調査地点の25%（西部地域が多い）で平均吸汁痕数が20を超えており、既に餌を求めてヒノキからの離脱が始まっていると考えられる。
- ・ 9月上中旬時点で、多くの果樹園では飛来はみられていないが、西部地域の一部（かんきつ、かき）で若干の飛来が確認されている。
- ・ 以上より、10月の果樹園への成虫飛来数は平成より少ないと予想される。ただし、ヒノキ球果での吸汁痕数が20を超えるか近づいている地点もあることから、一部地域では果樹園への飛来も想定されるため注意する。

防除対策

- ・ 静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・ 地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、ほ場の見回りをこまめに行う。ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、周辺ほ場への大量飛来がみられた場合、飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。なお、本虫の移動範囲は広いとため、地域での一斉防除が効果的である。また、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風・暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合があるので注意する。
- ・ 薬剤防除については、静岡県病虫害防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。

【茶】

<生育の概況等>

9月上中旬の巡回調査時では、緑化期～秋芽生育期であった。

●チャハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均寄生虫数 0.04 頭/1.25 m² (平年 0.17 頭/1.25 m²) と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった(平年寄生虫数 0.3 頭/1.25 m²)。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・9月上中旬の巡回調査では、摘採面の平均寄生葉率は 4.0% (平年 2.3%) と平年より多かった。地域別では、牧之原地域が平均寄生葉率 14.9% (平年 2.6%) と多かった。
- ・天敵のカブリダニ類の発生は、茶園 4 か所の叩き落とし調査で平均 2.0 頭 (平年 0.4 頭) と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、天敵の働きにより本種の発生はあまり助長されない。

防除対策

- ・既に発生の多い茶園では、整枝後に防除を行う。今後の発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を実施する。

<その他の病害虫>

●褐色円星病

- ・夏～秋に感染し緑斑症状を示した葉が、翌春になって落葉を引き起こす。よって、春になってからの防除では手遅れである。今春、多発したほ場で9月以降に殺菌剤を散布していない場合には、10月中に1回防除を行っておくと良い。

●ヨモギエダシャク

- ・9月上中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.2頭/4か所(平年0.1頭/4か所)と平年よりやや多かった。また、病害虫防除員12名中5名から、発生が多い報告があった。
- ・茶園内で局所的に発生するので、被害が見られた茶園では摘採・整枝後に茶園をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

●ナガチャコガネ

- ・一番茶で本種による被害が見られた茶園では、10月下旬から11月にかけて畝間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表面近くに上がってきたのを確認した上で、薬剤の土壌灌注処理を行う。
- ・薬剤処理は、降雨後に行うと効果的である。

【トマト】

＜生育の概況等＞

生育はやや早い～やや遅い傾向で、産地によりばらつきがある。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・9月中旬の東部および中遠地区での巡回調査では、平均発病株率0.3%（平年5.3%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・9月中旬の東部および中遠地区での巡回調査では、本病の発生は確認されなかった（平年0.7%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病を媒介するタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、タバココナジラミの項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。

●タバココナジラミ

予報の根拠

- ・9月中旬の東部および中遠地区での巡回調査では、コナジラミ類の平均寄生株率は4.4%（平年4.8%）と平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、増殖を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【だいこん】

●コナガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップ調査における9月1～15日までの誘殺数は平年並に推移している。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並であり、本種の生育適温は22.5～27.5℃のため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

＜その他の病害虫＞

●軟腐病・黒腐病・黒斑細菌病

- ・高温・多雨の条件で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生をやや助長する。
- ・生育の衰えは発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【ねぎ（白ねぎ）】

＜生育の概況等＞

生育は平年並～平年より約7日遅れている。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は11.2%（平年4.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、黒斑病は発生が助長される（黒斑病菌の分生子の発芽・形成適温24～27℃、葉枯病多発気温15～20℃）。

防除対策

- ・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
- ・薬剤防除は、予防散布や発生初期の散布が効果的である。各薬剤の使用回数に注意し防除する。
- ・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため、防風ネットの設置やアザミウマの防除に努める。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は21.4%（平年8.8%）と平年より多かった。また、被害程度を示す被害度は、42.6（平年13.9）と平年より高かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・例年、10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。発生が多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%（平年1.6%）と平年より少なかった。
- ・静岡県磐田市（農林技術研究所内）のフェロモントラップによる誘殺数は、9月第1～4半旬の合計で693頭（平年152頭）と平年より多かった。
- ・病害虫防除員2名から、平年よりも多い、あるいはやや多い報告があった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、直ちに除去する。
- ・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は10.0%（平年36.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早めに防除する。

【レタス(非結球レタスを除く)】

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。
- ・本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
- ・発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

- ・本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
- ・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●べと病

- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われるほ場では注意する。
- ・育苗期の防除を徹底し、発病株を本ばに定植しないよう苗を厳選する。
- ・発病葉は摘み取って、ほ場外に持ち出して処分する。

●モザイク病(アブラムシ類)

- ・感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝搬するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定植後の生育前半に徹底して行う。
- ・発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ナモグリバエ

- ・常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
- ・定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

●ハスモンヨトウ

- ・【作物全般】ハスモンヨトウの項を参照。

●オオタバコガ

- ・【作物全般】オオタバコガの項を参照。

【いちご】

<生育の概況等>

病害虫防除員の報告によると、苗の生育は平年並～やや遅く推移している。

●炭疽病

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、発病が疑われる株の抜き取りが進んでいたことから平均発病株率は0.5%（平年1.8%）と平年より少なかった。
- ・病害虫防除員の報告によると、9月の発生量は県内主要産地においてやや少ない～やや多い。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・発病株からその周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取りほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなど、適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散によって伝染するため、頭上かん水は避け、株元かん水など水の跳ね返りを防ぐ形でかん水を行う。
- ・薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤抵抗性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1～11）を使用する。
- ・発病後は薬剤による治癒が困難であるため、定期的な防除による予防を心がける。激しい雨や台風など水滴が飛散しやすい状況の前後は重点的に防除を行う。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・8月上中旬の育苗ほ巡回調査では、平均寄生株率は16.5%（平年8.0%）と平年より多かった。
- ・病虫害防除員の報告によると、主要産地における9月の発生量は平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、事前に防除を徹底し、天敵導入時にはハダニ類の密度が低くなるようにする。
ハダニ類が低密度に維持された条件下での天敵放飼が重要である。

<その他の病害虫>

●ハスモンヨトウ

- ・【作物全般】ハスモンヨトウの項を参照。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップ調査における8月21日～9月20日の合計誘殺数は、静岡市駿河区西大谷では平年よりやや多く推移しており、磐田市富丘および御前崎市合戸では平年より少なく推移している。
- ・いちご病虫害防除員6名中4名から発生量がやや多いもしくは多いと報告があった。
- ・その他にも、さといも、ほうれんそう、さやえんどうの病虫害防除員から発生量がやや多いと報告があった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・初期発生に注意し、若齢幼虫のうちに防除を行う。施設栽培の場合は開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップ調査における 8 月 21 日～9 月 20 日の合計誘殺数は、浜松市中央区協和町および磐田市富丘では平年並みに推移しており、および浜松市中央区伊左地町では平年より少なく推移している。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本種は幼虫の成長に伴い、植物体へ食入するため、薬剤の防除効果が低下するので、ほ場を観察し早期発見および初期防除に努める。

3 季節予報

● 1か月予報 （東海地方 令和7年9月18日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 9月20日から10月19日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		向こう1か月は気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率70%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	30	30	40
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	10	20	70

【予報の対象期間】

1か月 : 9月20日（土）～10月19日（日）
 1週目 : 9月20日（土）～ 9月26日（金）
 2週目 : 9月27日（土）～10月 3日（金）
 3～4週目 : 10月 4日（土）～10月17日（金）

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘 678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>